令和 8 年度　東京都内湾水生生物調査 9 月成魚調査速報

●実施状況

令和 8 年 9 月 3 日に成魚調査を実施した。調査当日は小潮で、満潮が 8 時 50 分、干潮が 14 時 01 分であった（気象庁のデータ）。調査当日の透明度は 1.0～1.8m であった。St.25、St.22、St.10 で赤潮が発生しており、海底は全地点で貧酸素状態が確認された。

魚類ではカタクチイワシのみ出現した。

	St.35		St.25		St.22		St.10	
作業時刻	9:54-10:35		10:50-11:35		11:44-12:31		12:26-13:42	
水深（m）	26.1		12.5		13.8		7.9	
天候	曇		曇		曇		曇	
気温（℃）	28.1		28.2		29.0		28.8	
風向/風速(m/sec)	SW/4.6		S/4.8		SSW/4.0		WSW/5.5	
波浪(m)	0.5		0.3		0.4		0.4	
透明度(m)	1.8		1.1		1.2		1.0	
観測層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層
水温(℃)	26.9	20.5	25.9	22.9	26.7	23.2	26.6	24.3
塩分（－）	26.3	33.7	24.0	32.5	22.5	32.6	15.3	31.5
DO(mg/L)	9.9	0.4	7.8	0.0	11.2	0.0	12.3	0.8
DO飽和度(%)	143.4	5.1	110.3	0.3	159.5	0.4	168.2	11.5
pH（－）	8.6	－	8.3	－	8.5	－	8.6	－
水の臭気	なし	なし	なし	中硫化水素臭	微硫化水素臭	中硫化水素臭	なし	なし
備考	7.0m 以深で貧酸素状態（DO：2mg/L 以下）が確認された。		赤潮が発生していた。3.5m 以深で貧酸素状態が確認された。		赤潮が発生していた。4.5m 以深で貧酸素状態が確認された。		赤潮が発生していた。6.0m 以深で貧酸素状態が確認された。	

観測層：上層（0m）・下層（海底面上 1m）。pH は上層のみ計測。

●主な出現種等　（速報なので、種名等は未確定です。）

主な出現種等	St.35	St.25	St.22	St.10
魚類	（出現せず）	カタクチイワシ	カタクチイワシ	カタクチイワシ
魚類以外（目立った種）	（出現せず）	イソギンチャク目(+)	（出現せず）	ホンビノスガイ(c) 紐形動物門(r)
備考	トリガイ、ツキガイモドキ、ゴイサギ、フジツボ類等の死殻が確認された。	上記の他、ウミタケ、オオキララガイ等の死殻が確認された。	上記の他、苔虫動物門、ミドリイガイ、ウラカガミ等の死殻が確認された。	上記の他、バイ、ツメタガイ、シマメノウフネガイ等の死殻が確認された。

注）表中の（　）内の記号は大まかな個体数を表す。

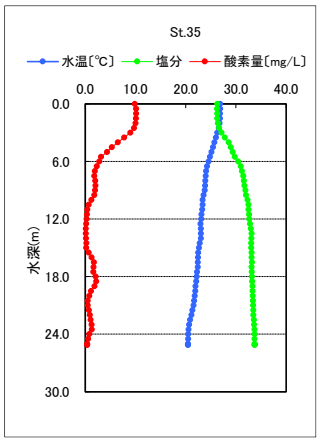
G:1000 個体以上、m:100～1000 個体未満、c:20～100 個体未満、+:5-20 個体未満、r:5 個体未満

調査地点：St. 35

調査地点位置



水質状況

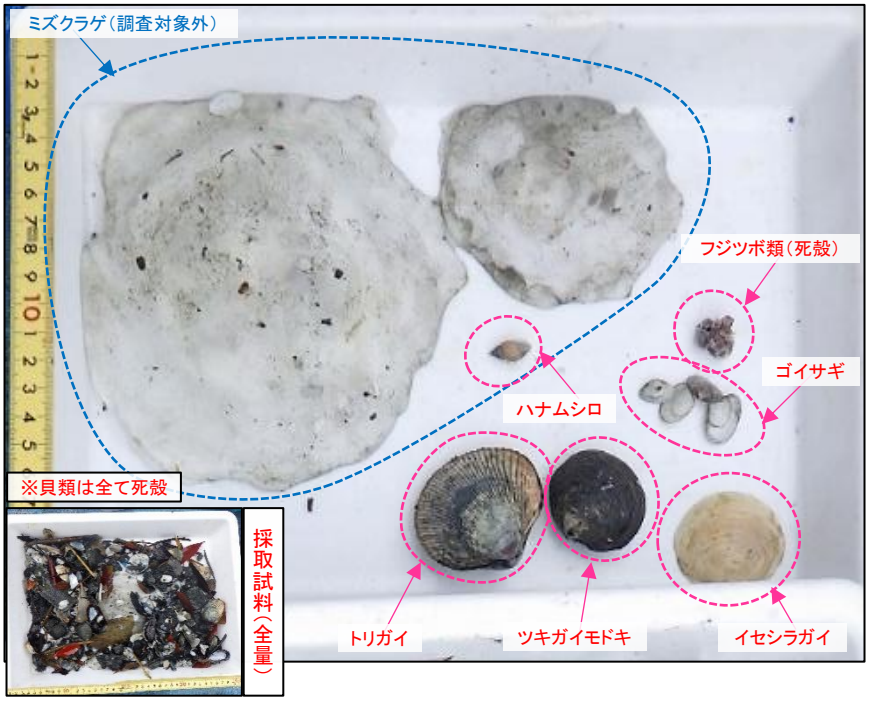


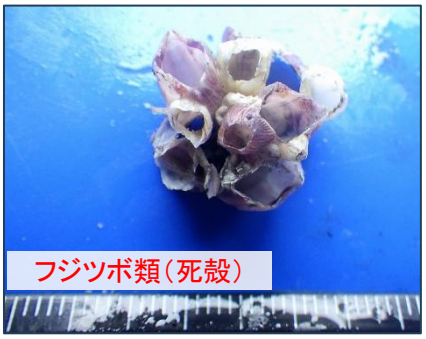
地点状況



南側には東京湾アクアライン「風の塔」が見える。

採取試料





甲殻類に分類されるフジツボは、幼生時代を浮遊して過ごした後、岩や人工構造物に付着する。写真にはタテジマフジツボやアメリカフジツボが見られるが、いずれも外来種である。近年、東京湾でナンオウフジツボ等の外来種の確認が続いている。

主な出現種　※写真のスケール 1 目盛：1mm



ほぼ球形で、殻は薄く脆い。長い足が鳥の嘴に見えることが名前の由来。内湾の砂泥底に生息し、湾奥では夏季の貧酸素水塊の発生により、ほとんどが死亡する。貧酸素水塊解消後に出現した稚貝は、翌春に 6cm ほどまで成長する。



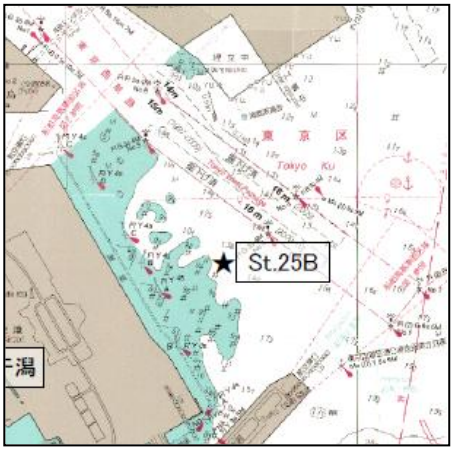
殻長 3cm ほど。同心円に広がる板状の筋が特徴。ツキガイ科の仲間は化学合成を行うバクテリアと共生し、そこで生産されるエネルギーを得ている。



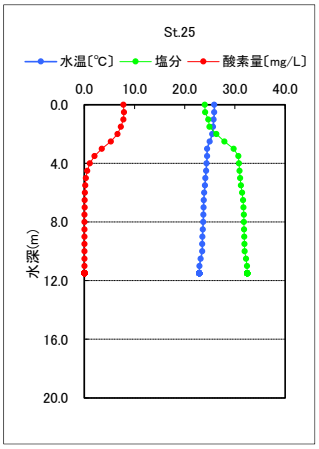
殻長 5cm ほどになる。水深 50m までの砂泥底に生息する。平べったい殻は白く光沢がある。

調査地点：St. 25

調査地点位置



水質状況



地点状況



西側には東京国際空港が見える。

採取試料

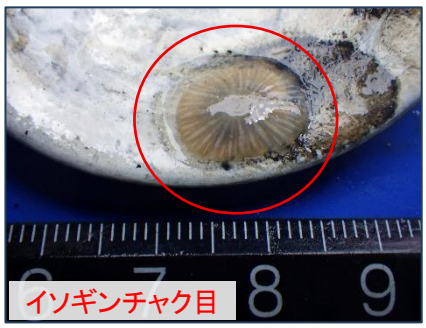




水面付近のごく浅い上層を大きな群れで回遊し、プランクトンを食べて生活する。体長は 15 cmほどになる。産卵期は 5 月から 7 月。

下顎が短く、上顎だけに見えることから、片口（かたくち）の名前が付いている。背が青黒いことから、セグロイワシとも呼ばれる。

主な出現種　※写真のスケール 1 目盛：1mm



サンゴや一部のクラゲと同じく、毒針を備え発射する刺胞という非常に小さい器官を持つ。この刺胞はエサの確保や身を守る際に使われる。貝殻や転石等に固着するものの他に、砂泥底に棲むものもいる。



殻長 8cm ほどのニオガイ科の仲間。薄く割れやすい殻はよく膨らみ、前後端は広く開いている。殻よりも大きく長い水管が特徴。環境悪化に弱く、東京湾ではまれに死殻が確認される。

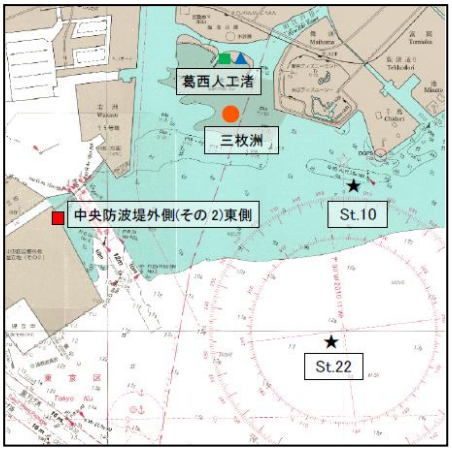


クルミガイ科の仲間。房総半島以南の水深 50～500m に生息する。内側の真珠光沢が美しい。現在は東京湾では死殻しか見つからず、関東地方の地層から化石として見つかることが多い。

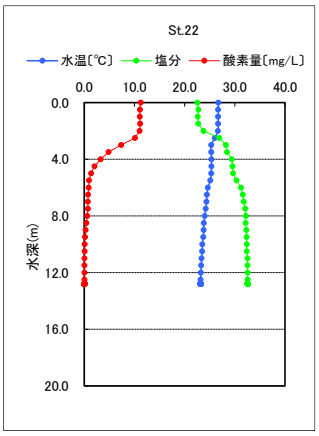


調査地点：St. 22

調査地点位置



水質状況



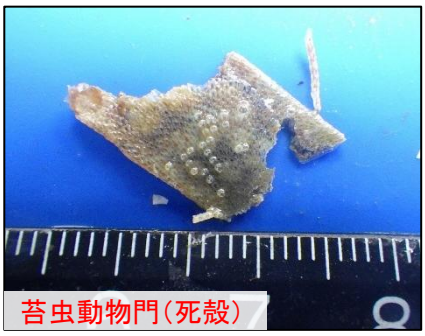
地点状況



北西側には東京ゲートブリッジがある。

採取試料





コケムシと言われる付着動物。石灰質等の部屋に収まった小さい個虫が数多く集まり、群体を形成する。今回はアマモの葉に付着したものが確認された。

主な出現種　※写真のスケール 1 目盛：1mm



※解説は St. 25 を参照。



インド洋から西太平洋の熱帯水域が原産。殻長 6cm ほどで、殻の形はムラサキイガイとよく似ているが、殻の色が鮮やかな緑色である。水温が 8℃以下になると死んでしまうが、水温が高い海域では越冬することができる。



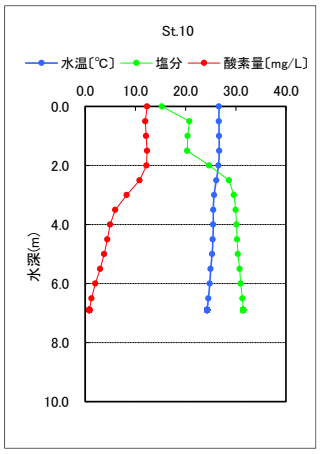
殻長 6cm ほどのマルスダレガイ科の仲間。本調査で確認されるカガミガイよりも殻の膨らみが弱い。東京湾では 1990 年代に絶滅したと考えられている。

調査地点：St.10

調査地点位置



水質状況



地点状況



北側には、東京ディズニーリゾートが見える。

採取試料





殻長 7cm ほどの巻貝。浅い砂底に生息する。厚めの殻に褐色の斑模様が特徴だが、成長するにつれ殻皮も厚くなり見えなくなってしまう。腐肉を食べる「海の掃除屋」でもある。以前、環境汚染により全国的に激減した。

主な出現種　※写真のスケール 1 目盛：1mm



※解説は St. 25 を参照。



北米原産の外来種で、殻長 10cm を超える大型種。殻は本来白色だが、貧酸素環境で生育したものは硫化物の影響で黒ずむ。東京湾では湾奥部の泥底やカキ礁周辺で多く見られる。



「ヒモムシ」と総称される動物群。紐状でとてもちぎれやすい。肉食性で、多毛類等を体内に収納している吻を伸ばして捕食する。